

# 昭和初期の外国人遍路：アルフレッド・ボーナー Alfred Bohner: a foreign pilgrim from the early Showa Period

ディビット・モートン<sup>1</sup>  
David C. Moreton

This paper examines the life of Alfred Bohner (1894-1954) and his book about the Shikoku pilgrimage, *Wallfahrt Zu Zweien: Die 88 Heiligen Statten von Shikoku* (English translation: *Traveling Together: The Pilgrimage to the 88 Sacred Sites in Shikoku*).

In 1922, Alfred came to Matsuyama to teach at Matsuyama High School for six years. In 1927, after taking his wife and daughter back to Germany, he spent about a month traveling around Shikoku and in 1931, published a book in which he describes in detail various aspects of the Shikoku pilgrimage including his own experience as a pilgrim.

While the University of Chicago anthropology professor Frederick Starr (1858-1933) was perhaps the first American to do the Shikoku pilgrimage, Alfred was most likely the first European and the first non-Japanese to write such an extensive document on the pilgrimage.

Alfred's life, comments from this students, a description of the contents of his book, a variety of specific details about the Shikoku pilgrimage in general and his experience, as well as a sampling of photographs included in his book will be presented.

## は　じ　め　に

昭和初期、アルフレッド・ボーナーはヨーロッパ人として初めて四国遍路をした。彼は、大正時代にアメリカ人として初めて四国遍路をしたフレデリック・スタールと共に「外国人と四国遍路の歴史」を考える上で重要な位置を占める人物である。ボーナーとスタールの四国遍路についての感想や意見は、80年から90年前の四国遍路の状況を探る上で貴重な資料である。スタールについては彼の人生や遍路経験を明らかにしてきたが、ボーナーに関する資料はあまり残っていない<sup>1</sup>。ボーナーはスタールとは違って、四国遍路についての著書を残している。ただ、四国遍路に関する文献を調べてみると、高群逸枝が一番早くボーナーを紹介しているものの、今日までボーナーの人物像や活動についてまとまった形で明らかにされていない。本報告は、ボーナーの人物像、彼の教え子のコメント、四国遍路について著作内容などを手掛かりにしながらアルフレッド・ボーナーが四国遍路をどのように理解していたかについて考察したい。同時に、その著書にある貴重な写真のいくつかも紹介したい。

## ボーナーについての引用や情報源

1939年に出版された『遍路と人生』の中で、高群逸枝は「…外国人ではアメリカのスタール博士、独逸人アルフレッド・ボーナー氏などがある。ボーナー氏は、元松山高等学校の教授で『同行二人』の著書がある。前記の諸氏にも、それぞれ遍路についての著書や、報告がある」（67頁）とボーナーについて記している。また、彼女は「遍路の文献」という箇所「『同行二人』Wallfahrt Zu Zweienアルフレッド・ボーナー著。松山高教授六年の著者がベルリンで出版したもの。遍路日記、各札所における信者の動機から、所謂同行二人の信仰を記述す。一九三一年（昭和六）刊。」（270頁）とボーナーの著書の内容を紹介している。

その44年後の1983年に出版された『Japanese Pilgrimage』（日本の巡礼）の中で、著者のオリバー・スタットラーはボーナーについて4回言及している。その一つには次のように記されている。「Bohner, a German, was teaching in Matsuyama; in 1927 he made the pilgrimage and wrote a book about it.」（訳：ドイツ人のボーナーは松山で教鞭をとっていた。1927年には彼は四国88カ所巡りに出て、その巡礼について著書を残した。）（229頁）<sup>2</sup>

さらにその23年後の2006年に出版された『Nanzan Guide to Japanese Religions』（南山の日本の宗教ガイドブック）にもボーナーについて次のように記されている。「In the West, Alfred BOHNER published the first study of this pilgrimage in German in 1931」（訳：西洋では、アルフレッド・ボーナーが1931年に初めてドイツ語でこの巡礼についての研究論文を出版しました。）（296頁）

しかし、学術文献に残されたボーナー氏についての情報はこの程度しかない。そこで、本報告では、次の資料を主な情報源としたい。

1. 本人が1931年に出版した著書：『同行二人：四国八十八カ所霊場巡り』の内容。
2. 1923年に松山で生まれたボーナーの娘、ハンナの証言<sup>3</sup>。
3. 愛媛大学の図書館に所蔵されている『松山高等学校・創立六十五周年記念・真善美』（昭和59年4月8日発行）にはボーナー氏の教え子や同僚が書いた手紙が残されている。
4. 『ヘルマン・ボネル先生生誕百年記念展示会』（ヘルマン・ボネル先生の業績を讃える会・大阪外国語大学ドイツ語学科研究室内・1984年11月11日）の冊子。
5. ハワイ大学のオリバー・スタットラー・コレクションに所蔵されている『同行二人』の英語版のコピーなど。

### ボーナーの人物像<sup>4</sup>

アルフレッド・ボーナーは、1894年4月11日、父のハインリッヒ・ボーナーが、スイスのキリスト教福音派団体、バスター布教団の宣教師として滞在していたガーナのアクラで生まれた。13人兄弟の末っ子であった。ドイツのミュンヘンとヴルツバークで学んだ後、第一次世界大戦中、アルジェで家庭教師をしていたときに捕らえられ、コルシカの収容所で民間人捕虜として4年間過ごした。

1921年頃、アルフレッドは、ドイツで職が見つからなかったため、兄ヘルマン<sup>5</sup>の紹介で、松山でドイツ語と音楽の教師の職を得た。日本に行くことが決まった時、彼は一人で行きたくなかったので、すぐに結婚して妻と一緒に日本に向かった。出発するまでに日本語を勉強する時間がなく、旅中に日本語の勉強を始めた。彼は1922年から1928年まで松山高等学校で教鞭をとった。1923年7月6日に娘のハンナが生まれたが、当時、アルフレッドは広島海軍兵学校でも教鞭を執っていたため、妻のコーネリア（愛称ネリー）は家に一人取り残されることが多く、また日本の生活や気候になかなか馴染めなかったようだ。そのためアルフレッドは1927年初めに妻と娘と一緒にシベリア鉄道でドイツに帰った。その後、彼は一人で日本に戻り、契約が切れる1928年まで日本に滞在した。その後、妻と娘が再び日本を訪れることはなかった。



アルフレッドは、1927年7月から8月にかけて四国遍路の巡礼を行い、その年の秋に東京にあるドイツ東洋文化研究協会で四国遍路について講演を行っている。この講演は非常に好評で、出版してはどうかと勧められ、講演内容に背景情報を加筆し、1931年に『同行二人：四国八十八カ所霊場巡り』という題名で出版した。その際、何人かの日本人学者の助言を受けており、その名前は序文に記されている。また、著書の中に掲載されている写真はアルフレッド・ボーナー自身が撮ったものである。

1928年3月に彼はドイツに帰国した。その後、何度か日本や四国について講演を行っている。1940年に彼はこの本を博士論文としてボン大学に提出した。第二次世界大戦中は、ドイツ空軍で英語や仏語を話す捕虜の通訳をしていたが、戦争末期には今度は彼自身が捕らえられ、フランスやイギリスの捕虜収容所で過ごした。その時、収集していた日本の掛け軸、日本や四国や遍路に関する資料等の所持品を全てアメリカ軍に没収され、その後返却されることはなかった。彼の娘のハンナによれば「どうして、彼のアパートにあったものを全て取り上げられたのかを知らない。父は1946年に彼の所持品を返してもらうように要求したが、駄目だった」<sup>6</sup>と言う。

アルフレッドとコーネリアには、ハンナ以外にヘドウィッグ（1929年ー）とハーマン（1935年ー）という二人の息子がいた。アルフレッドの三人の子供の中で、日本に住んでいたことがあるのはハンナだけである。アルフレッドはその後日本に深い関心を持ち続け、1954年の10月に亡くなるまで日本の新聞を読んでいたという。

### ボーナーの主な出版物

1. 1927年：「Japanische Hausmittel : das Buch "Kokon chie makura"」  
（古今智恵枕のドイツ語訳）、東京：ドイツ東洋文化研究協会、Vol 8. 68p.

2. 1931年：『Wallfahrt zu zweien. Die 88 heiligen Statten von Shikoku』  
（同行二人：四国八十八カ所霊場）東京：ドイツ東洋文化研究協会. 159p.
3. 1933年：『Schelen der Kiristan in Iyo』東京：ドイツ東洋文化研究協会. p50-56  
愛媛県のキリシタン活動
4. 1938年：『Tenchi Hajimaru no Koto: Wie Himmel und Erde entstanden』  
『Monumenta Nipponica』東京：Sophia University Vol 1: 2,  
p465-514 長崎のキリシタンの文書を研究して独訳したもの。
5. 1938年：『Japan und die Welt』（日本と世界）Langensalza : Beltz, 136p. ドイツ

### ボーナーの教え子からのコメント

『松山高等学校・創立六十五周年記念・真善美』（昭和59年4月8日発行）には、ボーナーの教え子による彼の性格や人柄についての記述がある。

#### 1. 「松高初期の外人教師への思い出」（98頁）

「次に赴任して来られたのはボーナー先生であった。先生は気さくな方で近づきやすい方であった…先生は特田で学校に極めて近い民家に生活しておられた。畳の部屋であるから靴を脱いで上がった。先生は西洋の人が靴のまま室に上がるのは汚いと言って笑われた…奥様を呼ばれて紹介して下さい。…先生は夏にはよく芦屋で過ごされた。」（河野清吾、2回文乙）

#### 2. 「ボーナー先生について」（126頁）

「ドイツ人のボーナーさんはよく工夫して授業をしていた。はじめての明治節に運動会があったが、肥満体のボーナーさんがトラック一周最後まで頑張ったのはさすが独逸人だと思った。第一次大戦時、イタリア国賓として行っていたというのは捕虜になったことをユーモラスにいったもので、腰には鉄の鎖をつけていたというので、そのことが分かったものだ。」（大内優徳 4回文乙）

「非常に熱心な先生だった。日本の国定教科書を買って読んでおられたが、だんだん読めるようになってきた頃、いつだったか何かの文章に「色男」というのがあったところ、色のついた男って何だと言っておられた。（湯浅孝孫：4回文乙）

#### 3. 「ボーナー先生の最後の手紙」（168頁）

「…先生のドイツ民謡はとてもすばらしいものでした…先生の不慣れな日本語が非常に印象的で…私が文乙に入学した頃のボーナー先生はもうすっかり日本語に慣熟され、言海をかかえてキャンパスを闊歩しておられた。徒然草を読んでおられるとか聞きました。われわれの在学中に一度腸暇で帰国されましたが、その時に、当時の「南海新聞」に掲載された帰国の挨拶もなかなか格調の高い候文で、先生が自分で書かれたものだとのことでした…アルフレート・ボーナーの、私なりに見た真骨頂は、自国語つまりドイツ語を外国人に教える天賦の才にあったと言わねばなりません。…自国語を教える才能に秀でた人は極めて少なく、ボーナーさんのような先生には生涯再び会えることができませんでした」

ボーナーからの手紙の返事

「…近在の各地から、文化講演を依頼され、「日本文化」について話をする機会が非常に多いのです。」  
（八木亀太郎：8回文乙）

### 『同行二人』の内容

この著書の簡素な紹介が1930年頃にドイツ東洋文化研究協会が出したチラシに掲載された。

「本書は、今でも日本人の生活に少なからぬ影響を与えている遍路について、初めて科学的に述べたものです。「四国八十八カ所霊場」は、全長1200キロの遍路道にあり、著者ボーナーは1927年に全ての寺を巡った初めてのヨーロッパ人です。道中、他の巡礼者と同じように、粗末な食事をとり、宿坊や木賃宿に泊まりました。

本書は4章に分かれています。第1章は、真言宗の開祖で四国遍路の精神的よりどころとなっている空海（弘法大師）と、四国遍路の歴史について述べています。第2章は、四国四県にひろがる八十八カ所霊場につ

いて、各寺の場所、特徴、本尊などについて述べています。第3章は、遍路となった著者自身について、服装などについて述べるとともに、霊場巡りをしようと思った理由を説明しています。第4章は、遍路道について述べています。また、遍路の心得、御詠歌、世界にも例を見ない「お接待」の習慣など、著者自身の体験にもふれています。更に、上記に加えて、著者自身による数多くの貴重な写真、付録、文献リストが含まれています。」

著書の目次を見ると、内容がもっと詳しく分かる。

序文、目次、前書き：四国巡礼—日本の国家的な現象

本文：四国の88カ所霊場

- A：歴史    1. 弘法大師    2. この巡礼の起源    3. 古い文献、記録など  
B：霊場    1. 各県にある数    2. 場所、宗派、本尊    3. 両部神道  
C：遍路    1. 動機    2. 道具  
D：道中    1. 出発    2. 規則    3. 祈り    4. 納経    5. 接待と修業    6. 歩きと乗り物  
            7. 宿泊    8. 断食    9. 女性    10. ご詠歌    11. 絵馬、功德、薬、厄除け

結論：四国88カ所巡りの 教育的、経済的、と宗教的な意義

付録 A： 88カ所霊場のリスト    B： 遍路用語    C： 2つの往来手形    D： 文献リスト    E： 四国の地図  
写真

## 四国遍路についての情報

本書は昭和初期の四国遍路実態を細かく紹介している。例えば、人数、必要経費、規則、やり方、鳴門の撫養港の風景、土佐について、海外からの巡拝団などが紹介されている。ここで、これらの点について説明する。

### 1. 遍路の人数について

- ・ボーナーは毎年3万から4万人が四国遍路を行っていると聞いていたが、土佐にある38札所のご住職、テライチ・ショウロは「それほど多くないだろう。たぶん2万人以下だろう」と言ったという。

### 2. 遍路の経費について

- ・現在、四国遍路をするための経費が高くなっている。
- ・先達は1日1円かかる準備をしておいた方がいいという。
- ・1合の米の値段は時期や地域によって違う。9.5銭から12.5銭までする。
- ・これを基準にして、請求の金額を決める。食べ残した御飯は道中で食べるように袋に詰めている。

### 3. 遍路の規則について

- ・霊山寺で配っている心得に従うべき。例えば、飛脚巡礼という方法では、信心深い人になれないので、普段の巡礼のやり方をするべきである。自分のご飯茶碗、湯呑み茶碗と箸を持参すべき、また、疲れているからと言って、部屋の中で荷物を散らかさない。（参照：資料1）

### 4. 遍路のやり方について

- ・もちろん巡礼は徒歩でしないといけない。遍路が足で渡れない場合、船に乗ってもいい。
- ・約70%の遍路は徒歩で巡礼をするという規則を守る。
- ・足が強い人はこの1200キロの旅を5週間で完成できる。しかし、普通は40-60日かかる。
- ・また、交通手段を使うと四国遍路の約3分の2まで行けるので、それを使うと全ての寺院を訪れるのに3週間で済む。
- ・納経所には遍路を車で送ってくれるというメモが貼ってある。
- ・多くの遍路は必要とする経費や物の半分だけを持ってくる。後の半分はお接待や修行によって得る。
- ・もし納経を書く人がいなかったら判子がある。しかし、遍路はこれを使うことを嫌う。
- ・約4分の1、最高で3分の1の霊場には、遍路のための宿泊施設がある。

## 5. 出発始点について

- ・早朝の2時から4時の間、船は撫養に着く。3月か4月に数十人、または数百人が旅にでることを興奮して待っている。これから巡礼に行く人は巡礼を終えた遍路にたくさんの質問をしている。その他の人は四国遍路の準備のために西国巡礼の御詠歌を歌っている。ある住職が皆と一緒に、大師や巡礼についての講演をする。寝不足の遍路は冷たい朝の空気の中、旅に出発する。

## 6. 土佐について

- ・遍路は土佐を鬼国と呼ぶ。宿を探すのが難しい。
- ・遍路は土佐を通っている間に不機嫌になり、土佐と伊予の間にある松岡峠で、遍路は土佐に後を向いて、遍路ズボンを下ろして、鬼国のために臭い物を残す。
- ・禅宗に所属している33札所の住職は思いやりのある人だった。そこで働いている女性は1926年に77歳の盲目の女性を四国遍路に連れて行ったそうで、彼女は経験から次のように語った。「土佐にいる間はできるだけ早朝に修行することだ。その方がお接待を頂きやすい。住民が寝間着を着ているぐらいの時間だと、きっと米をもらえる。午前10時以降の修行は無駄だ。」

## 7. ハワイの巡拝団について

- ・ハワイから四国遍路に人を送り出す協会がある。彼らの目標はただ修行のためだ。しかし、多くの場合、遍路はこの旅から特別なものを得たいと願う。それが病氣降ろし、即ち病気を治すことだ。

## 著書の結論

最後にボーナーは次の2つの疑問に辿り着く。(1) 四国遍路は独特な巡礼道なのか。(2) どうして他の巡礼道より四国遍路をする人が多いのか。その答えとして、彼は四国遍路には次のような分野で価値があるためだと説明する。

### 1. 四国遍路の教育的な価値とは

毎年、数千人が自分の街から出て違う地に足を踏み入れることは、大きな意味がある。旅をすることは、大きな刺激になって自分の街に戻るとそれが他の人に伝わっていく。また、他の県から来た人と一緒に巡礼道を歩くと、自分と違うものを支えたいという気持ちが強くなる。「助けてやろう」という深い思いやりは日本国内では四国でしか見られない。

### 2. 四国遍路の経済的な価値とは

ほとんどの場合、遍路をするための旅費は30銭から60銭ほどかかる。ときどきそれ以上かかる場合もある。毎年、四国内を旅する3万人の内、3分の1は四国以外の所から来る。ということは、年間30万円から60万円を四国で使う計算となる。これが四国経済に大きい影響を与える。

### 3. 四国遍路の宗教的な価値とは

多くの遍路にとって、寺院に巡拝することは、人生の中において重要なことだ。四国の場合は特にそうだ。なぜなら、四国遍路をする人は軽い気持ちでしないので、真の巡礼道と言える。四国遍路が他の巡礼道と違う点は弘法大師の存在である。彼は普通の巡礼者の仲立ち人で、彼の慈悲で人は涅槃への道を見つけることができる。

## ボーナーの遍路体験

著書には、ボーナーの遍路体験を知るためのいくつかの手掛かりがある。

### 1. 彼が使っていた収め札が載っている。(右)

愛媛県松山市 田町

有富礼道 坊寝児

アルフレード ボーネル<sup>7</sup>

### 2. 「松山市の近くにある寺院に2日間訪れ、その以外の寺院には1927年の7月12日から8



月5日までの間に訪れた。」(105頁)

3. (お接待の説明)「私は遍路として車や汽車で豪華に移動していたので、お接待を頂くためには相応しくないと考えた。また、私は一度も遍路の服装を着たことがなかった。しかし、私は金剛杖を手に持ちました。」<sup>8</sup> (93頁)
4. (人について)「(ボナーは)土佐にいる間、とても良い経験をした。住民や寺院の住職は友好的だった。また、伊予の人々も友好的で、親切であって、『ありがとうございます』をととても丁寧に言ってくれた。皆おしゃべりだ。だから、伊予は詩人、特に俳句の国となったのかと思う。」(45頁)「巡礼途中、(ボナーは)友好的な住職や友好的ではない住職と出会った。27番札所の尼さんは、特に親切な人物だった。」(45頁)
5. (ある木賃宿に泊まるまで)「(ボナーは)宿坊に2回、民宿に2回、教え子の家に1回に泊まった。それは運が良かったと言える。木賃宿に泊まるのは初めてだった。その日は暑くて、旅が困難だった。前日、琴平の民宿にいて、写真を撮るため、もう一度朝に善通寺に行った。その後、鉄道に乗って76札所金倉寺に行った。多度津にある次の寺院では、3年間イギリスに住んでいた上海出身の弁護士の奥さんが近寄ってきて声をかけてきた。彼女は去年に四国遍路をし、今年の夏の間にまた四国を訪れてきていた。」(108頁)
6. 「遍路は旅中にはアルコールを飲んではいけないと言われているが、私は宿坊に泊まった時に、よく朝食と一緒にビールをもらった。なぜなら日本の中学校の教科書には『ドイツでは、ビールはお茶の代わりにする』と書いてあったからだ。」(114頁)
7. ボナーは木賃宿に泊まったときの経験を細かく語る:

最初のトラブルは浴衣を忘れたことだった。いままでは泊まった所で浴衣を出してもらったが、ここではもらわなかった。他の客はちゃんと持参していた。仕方がなく、部屋で服を脱いで、裸のままで暗い台所を通ってお風呂場に行った。…その日の汗を流すことが気持ちよかった。部屋に戻った後、家主が来て「どのぐらいの米を炊きましょうか」と尋ねてきた。これが二つ目のトラブルだった。どう答えたらいいのか分らなかった。金眼鏡を掛けている客が(ボナーのために)「5合」と答えてくれた。他の客に「どうして家主は私に茶碗を出してくれなかったのか」と聞いたら、皆は一瞬、止まって、びっくりした目で私を見た。自分の茶碗も持参しないといけないことを教えてもらった。金眼鏡の客は家主を呼んで、私に茶碗を貸してくれないかと尋ねた。茶碗を貸してもらって、御飯を入れて、箸を探したが、また、皆は私をびっくりした目で見た。「何番の札所から巡礼をスタートしたの」と聞かれた。食事の後、宿泊名簿が渡されて、皆はそこに名前を書いた。数人は明日から使う収め札を書いた。もう一人はガイドブックを勉強した。寝る前に宿泊代などを払った。1合の米は9.5銭で、合計で47.5銭になった。東京から来ている男性は、家主にチップをあげる必要はないと言った。」(110-112頁)

その他にも「数回木賃宿に泊まったが、夏だったのでお客が少なかった。ある朝、木賃宿を出た後、私の小さいタオルに大きなシラミを見つけて気分が悪くなり、数時間旅を中断した。」(112頁)という記述もある。

## お わ り に

残念ながら紙面の制約からここではボナーの著書の内容を少ししか紹介できなかった。この著書が多くの人に読まれることを期待したいが、残念ながら本書はドイツ語で執筆されており、また入手も困難である。ボナーもこの問題が気がかりだったのだと思う。彼は、1931年に本書を出版したときに松山で知り合ったアメリカ人のキャサリン・メルル<sup>9</sup>氏に本書の英訳を依頼している。完成するまでに10年間の歳月がかかった。その訳者前書きにメルルは「英文の読者や日本の慣習を学ぶ学生たちのために、この興味深く且つ有意義な本が入手できるようにするべきだ」と記したが、結局この英語版は出版されなかった。しかし、最近、一部のコピーがハワイ大学のオリバー・スタットラ・コレクション<sup>10</sup>で所蔵されていることを発見した。英語圏や日本の読者が本書を入手できるようにすることが私の今後の課題であり、それによって外国人による四国遍路の歴史についての研究がさらに進むことを期待したい。

## 資料 1

霊山寺の心得・ 1927年 吉村チゼン

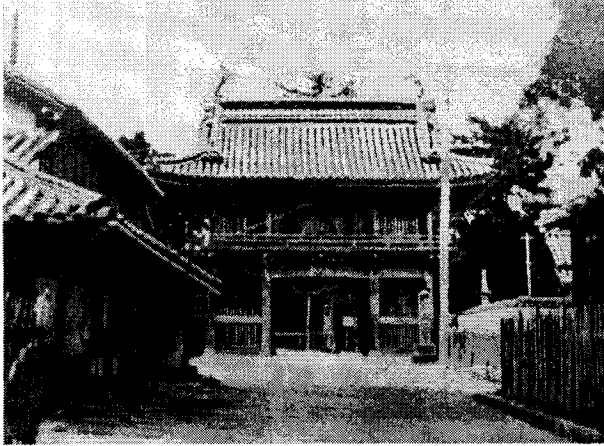
1. 悪いことを考えない。
  2. 純粋な心を持つ人だけが、巡礼に出るべき。
  3. 旅がいくら辛くても、怒りの気持ちを抑える。
  4. 自分の荷物から遠くはなれない。  
あまり荷物を持っていかない。  
今、要らない物を次の寺院に送る。  
自分の財布をテーブルに置かない、人に見せない。
  5. 自分のご飯茶碗、湯呑み茶碗と箸を持参するべき。
  6. 草鞋が一番良いが、もう1足持参するべき。もし、ゴム底の足袋を履くなら、1足で十分だ。
  7. もし、道中病氣、または弱っている遍路と出会ったら、その人を自分の友達のように助けて、世話をする。
  8. 旅中、自分と一緒に巡拝をする人の選択に気をつける。
  9. 「私は巡礼においてで沢山の経験がある」と言う人に気をつける。
  10. 札や杖に書く自分の住所を具体的に書かない。
  11. 道中、標識があるので、標識がない所に行かない。
  12. 旅館に着いたら、自分の足を洗うより、先に杖を洗う。
- 疲れているからと言って、部屋の中で荷物を散らかさない。
13. 昔のように、朝早く起きて、早く次の旅館に着くというルールは現在でも従うべき。
  14. もし、誰かの家に招待されたら、もし昼間であっても、それを受ける。
  15. 毎日、大師のように21軒の家の前に立って、托鉢をするべき。
  16. 飛躍巡礼という方法で、信心深い人にならるので、普通の巡礼やり方をするべきである。

- 1 David C. Moreton, An Account of the Shikoku Pilgrimage by Frederick Starr. The Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol.19, The Asiatic Society of Japan, 2005, p.106-111. デイビッド・モートン「フレデリック・スタール（お札博士）と四国遍路」、愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム実行委員会編『現代の巡礼—四国遍路と世界の巡礼 公開シンポジウム プロシーディングス』（愛媛大学）2007年. p. 31-40.
- 2 スタットラは1924-1927年の間、松山に住んだアメリカ人女性のカサリン・メルル（1885-1983）によって英訳された『同行二人』を参考にした。
- 3 2006年10月にスイスにいる知り合いが初めてハンナと電話で連絡をとって、11月にドイツに住んでいるハンナを会いに行って、彼女をインタビューした。その後、私はハンナは手紙で文通をしている。
- 4 写真：『写真集：暁雲こむる：松山高等学校創立70周年記念』秦敦編集—松山高等学校同窓会、1990年）
- 5 ヘルマン（1884-1963）は第一世界大戦の時、中国で日本軍に捕えられて、松山や徳島の板東俘虜収容所にいた。戦争後の1922-1963の間、彼は大阪外国語大学で教えた。墓は大阪にある。日本文化の研究者で、日本について多くの文献を著作がある。
- 6 ハンナからの手紙（2007年3月28日付け）
- 7 Bohner をカタカナで書くとボーネルになるが、発音を聞く場合、ボーナーになる。
- 8 ボーナーの娘によると、彼は四国遍路についてあまり語らなかった。しかし、彼は巡礼中、托鉢をしたことや、巡礼中に使っていた白衣、菅笠、杖や頭陀袋をドイツに持って帰ったことを言う。菅笠は後で捨てられたが、現在、家族の誰かが白衣、杖や頭陀袋を持っていると思うと言った。
- 9 Katharine Merrill (1885-1983) キャサリン・メルルのプロフィールやコレクションの説明: [http://asteria.fivecolleges.edu/findaids/mountholyoke/mshm054\\_main.html](http://asteria.fivecolleges.edu/findaids/mountholyoke/mshm054_main.html)  
彼女は1924-1941年、松山東雲高等学校で教えていた
- 10 <http://www.hawaii.edu/asiaref/japan/special/statler/bio.htm>

資料 2

『同行二人：四国霊場88ヵ所巡り』の写真

(Permission to use images provided by Hanna Strauss Bohner)



1番札所 霊山寺



9番札所 法輪寺



23番札所 薬王寺



25番と26番札所間の道



40番札所 佛木寺

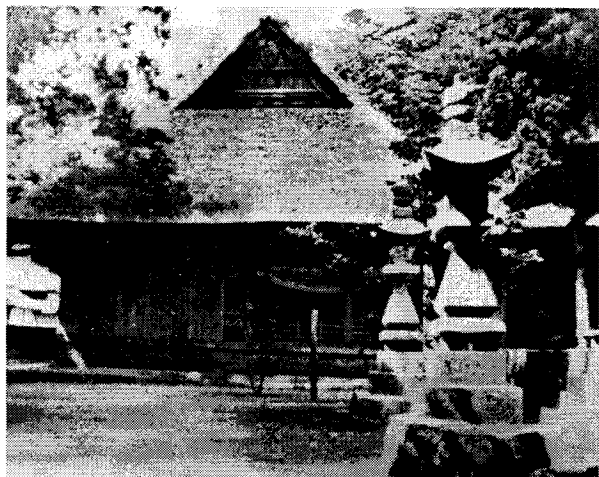




42 - 43番札所の間にある道しるべ



51番札所 石手寺 ハンセン病の遍路



66番札所 雲辺寺の通宿



納め札からできている弘法大師や衛門三郎



北海道からの遍路 無人販売店



母と二人の娘遍路